

つて、衣紋を繕ろひにかゝつた。

お重は心得て手を拍つた。女中が顔を出したの見て、背後向きに身體を振りながら、「姐さん何卒お會計を——それから人力車を二臺停車場迄大急ぎでね。」

女中は畏まつて退いた。

やがて女中が釣銭を盆に載せて持つて來たのを見て、お重は又其中から何程かを摘んで渡した。

「最う頂きました」と、女中は遠慮して受取らない。

「左様？可いから取つて置きなさい。」

「左様で御座いますか」と、おづ／＼これを手に握つて降りて行く。

鐘三は傍で聞いて居ながら、一人可笑しくなつた。こんな女が、自分で客に成つて來て居ながら、何んな知らない家でも、其家の女中と同列に立つたやうな物の言振や仕草の出るのが面白い。

間もなく、二臺の人力車は八間道を霧地に駛つた。停車場の黒い建物が正面に見える。兩側の柳の樹も暑さに萎れて、白い葉の裏を反して居た。

停車場では、一時間餘りも待つことに成つた。鐘三は時間表を見て戻つて、

「何うも、それなけりや、尾西線との連絡の都合が悪いやうだ。」

「左様ですか」と、お重も素直に言つた。

二人はそれ限り口を利かなかつた。お重も並んで腰掛けながら、時々足許を氣にして彼方此方置き換へた。服装に較べて、下駄の古びたのが氣に成るらしい。

やがて上りの列車が着く。お重は鐘三を促がす様にして、一番先に乗込んだ。そして、窓の外に簇がる浴衣がけの群集を覗いて居たが、つと振回つて、

「ありや皆な津島へ詣るんでせうね。何うせ向ふはえらい混雑だぜえも。」

「左様さな。」

鐘三は他の事でも考へて居た様に氣のない返辭をした。それにも拘はら

ず、お重は行先のたのしみに子供らしい眼を光らして、車中を見廻して居たが、何を見附けたのやら背後へ手を遣つて、並んで居る鐘三の膝をついた。何か言はうとした時鐘三の方でも、不意に、

「おい」と喚んだ。

其時、瀛車が揺ぎ出したので、其儘口を噤んだが、少時して、「俺は今日おしほを置去りにして来たんだよ。」

「えッ何うな」とお重も吃驚した様に振向いた。「そりや又、如何してな？」

「うゝむ」と鐘三はわざと側を向きながら、「只ね、今朝又出逢ふ筈にして置いたんだが、併し最う歸つたらうよ——来て見て居なけりやアね。」

「だつて」とお重は何か言ひた相にしたが、又思ひ直して止めた。程經つてから、「だつて、貴方も餘まりな事を爲さいましたわね。」

「うゝむ、何でもないさ。」

かう言つて、鐘三は女の顔を見詰めて居た眼を反した。何だかお重が考へ

違ひをしさうな氣がして仕様がなない。

其儘、二人は黙つて仕舞つた。一の宮で尾西線へ乗換へる時にも、只一言「い」と言つて立上ると、「其方？」と言ひながら、女も駈ける様にして隨いて来た。今度の列車は機關車からして玩具じみて客車も狭くろしい。それに下りの乗客とも落合ふのだから堪らない。二人はそれでも右左して腰を掛けるには掛けた。が、日の當る側なのに、日除を上げれば上げて、又どかりと蒸暑い。

「ひどい暑さだなも。」

お重は汗に成つた顔を感めながら、内密で言つた。静乎と黙つて居る苦しさに、それだけでも口を利くのが嬉しいらしい。

鐘三は只點頭いて見せた。

瀛車は田圃の中をのろ／＼と行く。乗つて居ても、もどかしいやうな速力である。やつと三つばかり途中の停車場を越して、目指す津島へ着いた。乗

客は玩具箱を打明け様子をぞろ／＼と降りて行く。

二人も其中に混つて停車場を出た。お重は男の前に立つてのそ／＼と歩いて行く。不圖鐘三は足を留めた。

「お前道を知つて居るかい。」

「えい」と女も振り回つた。「知らんけども、皆の行く方へ行けば可いでせう。」

「まア左様だな。」

二人は又歩き出した。両側には津島名物「あかね」を賣つて居る店が、何軒もつゞく。いろ／＼な飲食店でも、今日を晴れと景氣を添へて居る。十丁餘りて、やがて大鳥居の前に着いた。

近國に聞えた社だけに、境内もひろく、老樹日影も透さぬ程に茂つて、人込ながら神さびて見える。二人は神前に額づいた。お重は片方が頭を上げた後も、長い間一人て祈念を凝して居たが、やつとそれが済むと、男に寄添ひながら、「大したお捨りてすね。」

「うむ、えらい者だ。」

鐘三は何とはなしに笑つた。それからお重の言ふが儘に、火除の護符だの延命の守札などを頂いて、裏門から神輿の渡御のある大池の方へ廻つた。

大池のぐるりは一哩餘りあつて、池の水は川につゞく。土手の上には、黒山の様な群集が押かけて、一たび其中へ這入つたら却々出られ相もない。芝草の上にも、樹の叉にも人間が生つた様に登つて居る。これ等は夜宮を見て、其儘野天の下に夜を明かすのも有るさうな。

二人は前と後の人と人との間に挟まれながら、土手について池を一周りしやうとした。何處迄行つても群集は盡きない。茶屋の二階は云ふ迄もなく、新に棧敷を張出して赤毛氈に景氣を添えたのも、ところ／＼に見える。が、未だ時刻が早いので神輿は渡らない。あの名高い屋臺船も、各自の持場にかへつて、土手に纏いだまゝ、静まりかへつて居る。夜に成れば、あの傘鉾に灯を入れて、鉦や太鼓で囃しながら、池の中をぐる／＼乗廻すとか。晝間の光りて見

ては、幾代か持傳へたらしい緋羅紗の幕の色も醒めれば、金絲銀絲の剝げたのも鄙びて、其前に色の真黒な漁師の立て居るのも可笑しい。

かうして推されくしながら歩いて居たが、不圖横へ反れる坂を見つけて、男は先づ群集の中から脱出した。女もつゞいて出て来た。やつと人影のまばらな所へ来て。

「如何だい、子供に見せて遣りたいとは思はんかい。」

「えい」と、お重はほつとして背後を振り向きながら、「だつて此人込みぢや——

それこそ子供よりも親が堪らなう。」

鐘三は別に返辭もしなかつた。

少時、夕日の射した静かな片側町を歩いて居たが、何の氣もなしに露路を抜けて、又大通へ出た。一丁餘り行つた所に、此町では目立つやうな旅籠屋がある。其家の前に、鐘三は一寸足を止めた。お重も側へ寄つて来て、
「這入るの？」

「うむ、這入らう。」

其儘二人は軒をくゞつた。裏の座敷へ案内されたが、上も下も客が一杯で、女中は目を廻して居るらしい。鐘三はそつと紙入をお重の手に渡した。お重は其中から茶代を包んだり、女中に心附をしたりして、何も彼も一人て取計つた。

鐘三は浴衣と着代へながら、「お湯は可いのかい——行つても。」

「あの今一寸他のお客様が」と、若い女中はまご／＼して、「明きましたら直に左様申しますてなも。」

「ぢや、そりや後でも可いから——其代りに、お酒を早くね。」

鐘三は其處に胡坐を掻いた。そして、後向に湯衣を着代へて居るお重の姿を珍らし相に見て居たが、不意に

「あら」と喚んで見た。

「え」と女も扱帯をぐる／＼捲附けながら振り回つた。「何だいも。」

鐘三は只笑つて居た。お重もにつこりして横坐りに成つたが、團扇を拾つて相手をあふぎながら自分にも風を送つて、

「あゝ、やつとこれで息を吐いた。流車の中は暑かつたなも。」

「うむ」と言つたまゝ、又まじく女顔を見守つて居たが、「かうしてお前と一緒に他所へ出てゆつくりするのも随分久しぶりだね。」

「え」とお重は團扇の手を休めた。「何年前でしたね、あれは——何しろ貴方がおしほさんと二人で大聖寺から戻つてらして、親爺が知合の江戸の宿に匿まつて置いた頃ですからね。最う六七年ですわね。」

そこへ女中が膳を搬んで来た。片隅のしつぽく臺を出して、其上へ碗や皿を一つづつ並べたが、銚子を控へて、二人が座に着くのを待つて居る。それを、「私達でするから」とお重が退かせた。

そして代つて銚子を取上げながら、「左様々々、あの時は私も村に居られなく成つて大阪へ立つたつもりで、貴方方の側へ行つて居ましたわね。それか

ら又其處へも目を附けられ相だと云ふので、夜半に他の宿へ移つたりして——あれは大雨の降つた晩でしたね。水が出て、今にも落ちさうな橋を、三人手を曳いて渡つたが——おぼえて被坐しやるの？」

鐘三は手に持つた酒盃を下に置いた。如何いふものか、おしほの話が出て、も餘り興が乗らない。で、話題を轉ずるやうな積りて、

「併しお前は彼時分と一向變らないね。」

「私？」とお重は手を延ばして、相手の酒盃へ置酌ぎにしながら「あんまり左様でも爲いでせう。」

「うゝ、姿もだが第一心持がね。」

「そりやア」と何か言ひ掛けて、相手の顔を見返したが、「だつて、貴方も左様ぢや有りませんか。」

「左様かい」と鐘三はにや／＼笑ひながら、「お前の眼から見りや、元頃自分が彼方此方引廻して居た時分と同じ様に見えるのだらう。」

「そりや、如何してもね。」

「併しお前だつて男が怖い時代も有つたらう、え、左様ぢやないか」と鐘三はつゞけて訊いた。又酒盃を女にさして、「お前なぞ初めて稼業に出た時は何んな氣がするもんだい。」

「最う私は——」とお重は眉の根を寄せて手を振りながら、「え、娼妓ですか。」

「あ、初めて客に出た時さ。」

「其時分は、まア無我夢中ですね。」

「併し何だらう——今夜から何千と云ふ男に肌を觸らなきや成らんと思や、客が憎いとか又怖いとか云ふやうな。」

「お客に對して、そんな事は思ひませぬね。そんな事を思ふのは、矢張樓内の衆とか、朋輩に對してですよ。あ、云ふ所に居る人間てえものは、真個意地の悪いもんですからね。」

「左様か」と鐘三は溜息を吐いた。

何だか物足らないやうな氣もした。成程、自分の様に考へるのは、自分の様な者が左様云ふ境遇に陥つた時のことで、普通の女がそんな事を考へる譯はない。

何時の間にやら籠洋燈を持つて來て、座敷の真中に据ゑてある。鐘三はそれを見詰めたまゝ、餉臺の上に頬杖を突いて、凝乎と考へ込んだ。

お重も何を考へて居るのやら、少時俯向いて黙つて居た。不圖顔を上げて、相手の顔を覗き込む様にしながら、

「お睡いの」と訊く。

其儘男の側へ躰り寄り寄つて、「お臥るなら、私の膝を貸して上げませうか。」

「あゝ」と言ひながら、鐘三は一旦起上つた。直に又女の膝を枕にして寝轉んだが、びく／＼太股の肉が動くに伴れて、眼が冴えて、急には眠られ相もない。女は團扇を使ひながら、男の顔を見下し居る。

鐘三は不意に其手を留めた。

「お前、何日やら腕に入墨をして居つたやうだが、如何したい。」

お重は少時解らなかつたらしい。やがて、

「これ？」と言ひながら、袖をたくし上げて見せた。二の腕に、男の名でも入れたのやら、灸で消したらしい痕がある。

「こんな事爲るもんぢや有りませんぬ」と、二三度其上を擦りながら、又その袖を被せた。「若い時は前後見ずに無茶苦茶でするんですけど。」

「併し可いさ、若い時は二度ないからな」

鐘三はぐるりと仰向けに成つた。急に苛々して、「俺は自分の爲たことを後悔しない、又後悔したくない。縱令後悔するとしても、それで可いんだよ。未だしも後悔するやうな事でも有つた方が可いんだよ。世の中には後悔する事さへない人間も有る——え、解るか。」

「え、解るやうな解らないやうな——まあ陳紛漢ですね。」

「こんな寢言は解らなきや解らないでも可いさ」と、投出した様に言つたが、

「ね、左様してる間に、昔の話でもしないかい。其入墨の主の情話でも可いよ。」

「左様ですわね」と、お重は一寸膝をずらしながら、又坐り直して、「そんな話はしても面白くないんですよ。何もそれが一番苦勞した男と云ふ譯でも有りませんから。考へて見りや——」と言ひ掛けて、凝乎と男の顔を覗いて居たが、「貴方も睡んでせう。」

「うゝむ」と、眼を瞑つたまゝ、頭を横に振つた。「で、如何したい。」

「え、考へて見りやアね」と、一言づゝゆつくり言ひながら、「私なんざ、一生此人と云つて惚れた男は無いのかも知れませんが。左様思ふと、我ながら可哀相なものですよ。」

鐘三はうと／＼としたと見えて、つい返辭を仕忘れた。はつと思つて眼を開いたが、又うと／＼と成つて行く。其間、お重は始終それを見張りながら、折々思ひ出した様にはたり／＼と團扇を動かして居るらしい。不圖、誰やら耳の側で喚んで居るやうな氣がして、目を覺ました。

「ね、御飯を喫りませんか。」

お重は二たび肩に手を掛けて訊いた。

其手の外して、寝返りを打ちながら、「まア可い後で可い。」

「だつて、最う膳を下げるんですよ。」

「ぢや、喰はない。」

「え、喫らない？」と、男の顔を眺めて居たが、「本當に可いんですか——下げても。」

鐘三は返辭をしなかつた。

少時して、「ぢや、隅ッこへ寄せて置いて、早く寢床を延べて下さいな」と、お重の吩咐ける聲が聞えた。

やがて女中が這入つて来て、いろ／＼座敷の隅へ片寄せながら、二つ並べて寢床を敷いた。鐘三は匂つて行つてどたりと其一つへ横に成つた。頭の上をずる／＼と引摺りながら、蚊帳も釣つた。女中は二人に挨拶をして出て行

く。つゞいて、お重もばた／＼と草履の音をさせながら、後を追つた。

其後、鐘三は一人床の上に倒れたまゝ、うと／＼して居たが急に眼が研えて寢附かれない。障子を閉めた所爲か、室の中は急にひうひする。籠洋燈の灯がぼんやり蚊帳越しに見えるばかりで、家の中は森として、物音一つ聞えない。何を爲て居るやら、お重も却々戻つて来ない。

一時間も経つたと思ふ頃、お重がわさ／＼と障子を明けて這入つて来た。

風呂から上つたものらしく、蚊帳の外に鏡臺を持出して、いきなり肌を脱いだ。先づ髪を梳いて、それから毛筋立て髭をふくませながら、眼ばかりに成つて、鏡の中を覗いて居る。其眼が生き／＼して、畜類の眼の様に働く。

鐘三は蚊帳の中からそれを見守つて居たが、不意に、「あら」と聲を掛けた。

お重は吃驚した様に振回つた。両手でそつと白粉を抑へて居た濡手拭を顔から離して、

「まア起きて被坐したの。」

「最う晩いのかい。大分静かな様だね。」

「え、皆夜宮を觀に行つたんですよ」と、二たび鏡の中へ向いて、刷毛で鼻の邊りをはたきながら、「貴方も一風呂浴びて被入しやらないか。好いお湯ですよ。」

「うむ」と言つたまゝ、鐘三は動かうともしなかつた。

お重は最一度濡れた手拭で額の生際を抑へて居たが、つと立上つて、それを柱の折釘に懸けると、

「あゝ暑い」と言ひながら、立膝をしたまゝ、ばたくと團扇を使ひ出した。

「ね、早く行つてらつしやいな。晝間の汗が除れて、清々しますよ。」

「うむ、行つて来やうかな」と、鐘三もむづ／＼仕始めた。蒲團の上にて起直つたまゝ、ぼんやり坐つて居る。

「さ、早く出て被坐しやらないか。」

お重は手拭を出して、蚊帳の裾に手を掛けながら催促した。やがて、のそ／＼と出て来た。

「其處を突當つて、右へ廻ると直きですよ。可いんですか。」

「あゝ」と言ひながら、趾の先に草履を突掛けて、ふら／＼と出て行く。何の部屋も出拂つたと見えて、廊下に添うた障子には、一つも灯影がさして居ない。

湯殿は浴槽から羽目板迄黒ずんで、湯も眞白に汚れて居たが、手を入れると、却々しつかりして居る。いきなり飛込んで肩迄浸りながら、ほつと息を吐いた。一種の甘酢いやうな垢のほひが鼻を突く。不圖、自分の前に、此湯の中に浸つて居た女の姿を眼に泛べて見た。あの健康さうな四肢をゆつたりと水に浮して、時々思出した様にぼちや／＼遣りながら、又静乎として居る。呼吸をするたびに、あの小鼻が開く――

鐘三はざぶりと音をさせて立上つた。浴槽の縁に腰を掛けながら、

「本當に、俺はあの女を如何するつもりか知ら――本當に、左様思つて居るの

か知ら——俺には最う自分の心持が解らない。」

不圖眼を上げて、四邊をきよと見廻した。

「此儘湯から上つて、直に此宿を出て仕舞つたら——あの女一人座敷に残して置いて俺の方で何處かへ影を隠して仕舞つたら——」

入口の戸に眼を着けたまゝ、そんな事も考へた。勿論、そんな真似が出来やうとも思はない。

やがて二たび湯に浸つたが、ぢやぶくと好い加減に汗を流して上つた。

板の間に立つて、一巡身體を拭くと、浴衣を引掛けながら出て行く。

お重は蚊帳の中に寝轉んで團扇の柄を動かして居た。男が這入つて來たのを見ると、

「お先へ失禮しましたよ」と言つたまゝ、起上らうともしない。

鐘三も黙つて濡手拭を柱に掛けて居たが、つと蚊帳の裾をまくつて這入つた。其儘、ごろりと横に成つた。

お重は遠くから團扇の風を送りながら、「此處に一人で居ると能く太鼓の音が聞えますよ。」

鐘三は枕の上に仰向いたまゝ、黙つて居た。やゝ有つて、

「あゝ」と返辭をした。

お重も、相手が眠るのだと思つて、其儘黙つて仕舞つた。が直には寐附かれないと見えて、むづくと動く。時々、生欠呻と一緒に溜息を洩らしながら、どたりと寝返りを打つた。

「おら」と不意に鐘三が喚んだ。

お重は背後を向けたまゝ、「えい。」

「お前も寐られんのかい。」

「えい、何だかむうむして」と言ひながら、又此方へ寐返りを打つた。其はづみに、爪先が男の脛に觸つた。つと其足を引いたが、二たび枕を仕直して、

「いやに蒸す晩ですわね。」

「うむ、暑いな。」

鐘三は仰向いたまひ、やつとそれだけ言つた。

「それに、二杯でも御酒を頂いたもんだから——一寸御覽なさいな、これを」と男の手を持添えて、「ひどひ動悸でせう。」

成程しつとりと汗掻いて居る。

「私は若い時から斯うなんですよ」とそつと其手を離した。

鐘三は其手を引きながら、急に、

「ね」と喚んで見た。少時後の言葉が續かない。

やがて、「お前は覺えて居るかい、俺と二人で練船の一軒家に泊つたことを

あの夜半に親爺が迎ひに来て、お前を連れて行つた晩のことさ。あの晩如何したか記憶えて居るかい。」

「えい」と言つたまひ、お重はぼんやりして居る。

「何だぜ、お前が赤ン坊でも抱く様に、両手で俺を抱えたまひ、ぐうぐう寐て居

た時だぜ」と相手の顔を見返りながら、「え、本當には覺えて居るかい。」

「えい、おぼえて居るわな」と小さな聲をした。

「あの時、お前は如何云ふ積りで、あんな真似をしたんだい。え、それを言つて御覽な。今此處で言つて御覽な。」

お重はいよく、摺寄る様にして、何とも言はない。

鐘三は擬乎と天井を見詰めて居た。

不圖此女は唯口を合せて居るばかりで、そんな事は覺えて居るのぢやないか

と云ふやうな氣が附いた。左様思つて見りや、こんな女がそんな一時の氣紛れを何時迄おぼえて居る譯がない。

「え、如何したんだな」と女の肩に手を掛けて、「さ、言つて御覽。如何云ふ積りてしたんだか言はないか。」

「そんな事は——」

お重は小娘のやうな鼻聲を出して、顔を見せまいとした。男の腕に獅噛み

着いたまゝ、離さない。二人は聲を立てずに掴み合つた。何何成るのか、二人とも解らない。只女の眼が光つて居る。男の力でも時々まくし立てられて敵はない様に成つた。やつと取つて押へて、息を吐きながら、相手の顔を見下した。女も組敷かれたまゝ、男の顔を見上げて居る。

「如何しやう、——此女を。」

鐘三は眼を瞑つたまゝ、ぐつたりと横に倒れた。

* * * * *

朝風に、蚊帳の裾がすうとまくれた時鐘三は、はつとして眼を開いた。夜が明けたと見えて、障子の紙が白い。

其儘蒲團の上不起直つた。

お重は未だ寐て居る。一枚の裕衣を胸に被けたまゝ、あんぐりと口を開いて寐て居る。今が未だ寝入りばならしい。如何にも樂さうな寢息が出たり入つたりする。疑乎と女の寢顔を見詰めながら、鐘三は思はず身戦ひした。

あの口で、あの小娘らしい口を利く？

昨宵のことが一つ／＼こゝろに戻つて来た。男の心持を悟つてから、らりと女の態度が變つて、急に蟲も殺さぬやうな、小娘らしい口の利方をした。

此方で氣の減けるやうな、甘つたるい仕草もして見せた。

今眼を開いたら、矢張、あの口で、あんな口を利くのか知ら——

鐘三はつと眼を反して立上つた。廊下へ出て、幾たびとなく同じ室の前を

往つたり來たりした。又急に立停つては、庇の下から蒼空を見上げた。空は

からりとして一點のくもりもない。

「あのお手水を」と、女中が背後から聲を掛けた。「此處に楊子を置きますてなも。」

「あゝ」と、兩手を頸に組んだまゝ、振り回つた。それを掴んで、のそ／＼と降りて行く。洗面所は湯殿の隣にあつた。大分込合つて居る。やつと自分の番が來たので、そこ／＼に含嗽をして戻つた。

部屋には、お重が最う起きて、女中を相手に何やらぼそくと話して居たが、男と顔を見合せると、何も言はないで、只にやりと齒を出して笑つて見せた。其儘、女中と話をつゞけて行く。

「へえ、そんな人死が有つたんですか。」

「何でも旅の者ださうで御座いますか」と女中は客の前を憚る様に、手にした座拂を持扱ひながら、「お爺さんに死なれて、孫がひい〜泣きながら警察へ連れて行かれた相で御座いますよ。」

「まア可憫相に」とお重は顔を蹙めた。「昨夜は何處で寐たんでせうね。」

「いづれお上で好くして下さるんでせうが」と女中は立つて座敷の掃除にかゝつた。「御免なさいましよ」と言ひながら、はた〜障子を叩いて居る。

「本當にそんな話を聞くと」とお重も手拭を取つて、廊下へ出た。楊子を啣えながら、た〜と駆けて行く。

やがて、お重が戻つて来た時分には、座敷の掃除も済んで、朝の膳も並べてあ

つた。わざと男の顔を見ない様にして、室を斜に切つて床の間へ近づいた。

鏡臺の前に坐つたまゝ、片手を上げて髪を梳きにかゝつたが、髪の毛が結ばれて、皆く櫛が通らない。時々、自烈な相に引ちぎつて、櫛の目から脱氣を指に巻いたりした。何だかそれが男の見て居ることを意識して遣つて居るらしい。

矢張、おしほの代りとして、おしほの蔭に置いて見る外に、此女に意味はない。此女一人に意味はない。

鐘三はそんな事を考へて居た。

やがて女が自分の前に坐るのを待つて、「あい」と喚んだ。「お前は今日一人で自宅へ歸れるだらうね。」

お重は只相手の顔を見上げた。

「何だよ、俺は一寸これから旅をして、上野から大和の方を一巡りして來やうと思ふから」と女に口を容れさせぬ様につゞけて言つた。「それで可いだら

「左様ですか」と言つたまゝ、お重は未だ好く吞込まれぬやうな顔をして居た。

「ぢや早くお前も出掛ける用意をするが可い。」

俄に後ろから急立てる様にして、朝飯を済ました。女中を喚んで、勘定も拂つた。別に、何枚かの紙幣をお重の手に握らせながら、「これは自宅へ買つて行く土産の金子だよ。可いかい。」

二人は水鳥の立つ様に宿を立つた。途中も並んで歩きながら、何やらこぢれたやうな心持がして物を言はなかつた。

停車場へ着くと、恰度西行の出るところで、驛夫が鈴を振つて居る。鐘三は駆けて行つて切符を買つた。

「ぢや、お前は昨日の片道が有つたね。」

其儘、お重の返辭を俟たないで、向側へ線路を横切つた。

十一

お重の阿父は村の下人で、墓掘で隠亡である。昔は、百姓の家の軒下に土下座をさせて、臺所へは上げなかつた位のものである。が、同時に村で一人の藝人である。藝名を二代目吉田樂丸と云つて、百姓の隙間な頃を見ては、村から村へうかれ節を語つて歩く。時には越前から飛彈境迄行くこともある。

尤も、近年治下の村では滅多に招ばれない。と云ふのは樂丸のうかれ節も大分聞き古したので、毎も伊賀の水月や野狐三次では聞く氣がしない。又語る方でも左様々々種子がつゝかないと云ふ譯である。が今年、は師匠の名を繼いだ祝ひに村の若者連中が膽入りで、一晚座敷をして遣ふことに成つた。それに他村との釣合上若者連中の名を入れた後幕を送つたので、村中はなかく喧ましい。

夕方からぼつ／＼村の者が座敷を貸した家へ出掛けて行つた。若衆は眞

先に來て、それ／＼高座やら樂屋やらの仕度をした。高座と云つても、土間に椽臺を二つ重ねて、後ろに幕を張るだけに過ぎない。座敷の障子や襖を取外して、ところ／＼に洋燈を點火したから、急に見違へる程明るく成つた。庭の柿の樹に灯が映つて、こんもりした緑の葉が透されるのも夏の景物らしい。だん／＼聴衆が詰め掛けて來た。それが座敷に溢れて、椽側から庭先にも大分立つて居る。若い娘などは、わざと人に顔を見られない用心をして、柱や壁の陰に成つた暗がり立つて居るものもある。又、それを覗つてうろつく若衆もある。庭には、氷屋を始めとして、二三人物賣が店を開いて居た。時刻を見計つて、樂丸が高座に現はれた。お耳新しからぬ點は、幾重にも容赦を願ふと云ふ、前口上よろしく有つて、偕て始めたのは、官員小僧何某なる散髪物である。皺唄れた聲で、轉びも好いが、話に成ると一向訝えない。三味線弾は、目の腐つた例のお花婆さんで、始めからこくり／＼睡つて居る様である。一段濟むと、ざわ／＼と座席がどよめいた。便所へ立つのもあれば、氷屋へ

駆着けるものもある。次の段が始まる間に成つて、お關はうろ／＼しながら小用を足しに出た。二たび、戸口を這入らうとしたが、不圖物蔭に立つて居る男を見附けて、

「まア吃驚した。鐘様ぢやないかなも。」

「あゝ」と、其男が返辭をした。

「お前様まア何時歸つてりやアした。全體何處へ行つて來たのぢやな」と、疊みかけて訊く。

「今日歸つたのさ。自宅へ着くと直ぐに此處へ來て見た。」

「今夜な？」と、憫れた様に、相手の顔を見詰めて居たが、「お重に訊いても、只津島で別れた限りで何處へ行かしたやつた分らんと云つて居るし、其後十日も十五日も音信がないもんぢやて、本當に狐に魅まれたやうな氣がしとつたが、全體何處をうろついて居たのぢやな。」

「何處と云つて」と、鐘三はうろ／＼と笑ひながら、「只伊賀から大和路、それか

ら京都へ引回して近江の湖水の端を歩いて居たが今日の午後草津から汽車に乗つて今着いたばかりさ。」

「へえ男と云ふは好えもんぢやなも」とつく／＼言つたが、「それでも好う歸つてお呉れやした。私は又往きつ限りぢやないかと心配して居つたが。」

「うむ、左様成つた方がな。」

鐘三は寂し相に笑つて居た。

「時に」とお關は急に小聲に成つて、「今夜おしほ様が出来て見えるぞな。此處からは見えんか知らんが」と二三歩戸口の方へ寄りながら、「一寸此處迄来て見やアせ。ほら、彼處の柱の蔭に顔が見えるぢやろがな。此家の人達と一緒に成つて——ほら今向う向いて隣の婆さまと話をしてみえる。」

「うむ」と言ひながら鐘三も明るみへ半分顔を出して、家の中を覗く様にした。成程おしほが来て居る。一緒に来て居るのは隠居のおとわ婆らしい。「あれは隠居の婆さんだね。」

「え、あの婆さまが又要らん事に口を出してなも——今でもおしほ様はあの女のために何れだけ餘計な苦勞してぢやか知れんぞな。」

鐘三は返辭をしなかつた。

何と思つておしほが斯んな所へこんな物を聴きに來て居るのか知ら——あの夜あれだけの事を聞かされながら殆ど何んな心の動搖をも感じなかつた様に平氣な顔をして、こんな所へ來て居られるのか——何うせ左様云ふ女と覺悟はして居るもの——何だか佗しい。

「なも」とお關が聲を掛けた。「些との間中へ這入つて遊んで行かんぢやかな。」

「左様さな」と言つたまま、稍後込みした。何だか氣が進まない。

「可えぢやないかな」とお關は袖を持つて無理に引張りながら、「何も村の衆に氣兼ねることはないぞな。貴方が何を爲やしたとて、鐘一文彼の衆に迷惑を掛けてあれせんでなも。」

相手は何気なく言つた。併し鐘三にはそれだけに舊傷に觸られたやうな気がした。成程俺は此村の娘をまどわしてそれを振捨てたに違ひない。此村で初めて東京へ出て大學迄進みながら途中で學籍を削られたにも違ひない。此村の人の恐れるやうな戸籍に赤い印のついた者は破戸漢の市公と自分との外には無いのかも知れない。がそれが何だ。俺が村の者に逢はない様にしたのは村の者を恐れた譯ではない。

「ぢや一寸聽いて行かうかな。」

「え、左様しやすな」とお關は背後から押込む様にした。「それに今夜はお重が出て一段讀む筈ぢやに何卒聽いて遣つてお呉れやすな。」

「えい？」と鐘三は思はず振回つた。「そりや本當かい。本當にお重がうかれ節を遣るのかい。」

「今に高座へ上るに見やアす。」

「ふうむ」と言つたまゝ急に如何しやうかと心が迷つた。が併し最う躊躇

するには遅い。お關は土間に蓆を敷いて坐つて居る子供の群を押分けて、大黒柱の側へ鐘三を連れて行つた。そこに漸と膝を入れるだけの席をつくつて呉れた。側の者はきよとくしながら新來の客を迎へたが、勿論見知つた顔なので中には傍へ来て挨拶するのもあつた。左様爲ないのも、相手を見くびつて爲ないと云ふよりは寧ろ憚かつて爲ないらしい。

一時はざわ／＼とした。が鐘三は成るだけ傍を向かない様にして、凝乎と正面の高座を見詰めて居た。此高座の上にもお重が——あの女が現はれて何を饒舌るかと思ふと、今更自分の置かれた地位が自分ながら滑稽に見えて仕様がなない。

如何したのやら却々前の垂幕が上らない。聴衆はわざと掛聲をしたり、口笛を吹いたりして冷かした。「夜が短かいぞ」と嗷鳴る小若衆も有つた。

不圖鐘三は背後を振回つて見た。何時の間にか歸つたと見えて、元居た所におしほの姿は見えなかつた。

やがて、お重が三味線弾と一緒に高座へ上つたらしい。何やら二人で話しながら笑つて居る聲がした。鐘三は思はず眼を伏せた。

一つ見臺を打つ音に伴れて、すると正面の幕が上つた。お重はべら／＼した黒の羽織を引被けて、木地の見臺の前に控へて居たが顔を上げると、ずつと座敷中を見渡した。鐘三とも眼を見合せたが別段氣にも留めぬらしい。やゝ上眼使ひに天井を見詰めたまゝ、何やら口の中で唸り出した。如何にも初めて出たらしく、節廻しも調子も不味い聲からして、全然煉れて居ない。が、併しそれだけ上品かも知れない。

鐘三は向うで見て居ないのに乗じて、そつと女の横顔を見守つて居た。汗をだく／＼流しながら、一生懸命に遣つて居る。一生懸命に成れば成る程、いよ／＼聲が甲走つて、いよ／＼聽いて居られない。讀物は親譲りの『野狐三次』らしいが、何うやら筋も通らない。到頭、一段滅茶々々にして除けた。

が、村の若衆達には、それも解らないと見えて、手を拍つたり、掛聲をしたりし

て喜んで居た。其間に、鐘三はこつそり戸外へ出た。

戸外にも風はない。木の葉もしつとりとして、草木も息をせぬやうな晩である。乾の空には、間断なしに稻妻が閃く。

鐘三は垣根について歩いた。お重と物を言ふのが可厭さに、一段が濟まぬ間に出は出たものゝ、別段何處へ行く宛もない。さりとして、此儘自宅へも歸りたくないやうな氣がして、一筋道をぶら／＼と歩いて行つた。何の家も家中明け放しにして、燈火も點してない。時々脊戸に立つてはた／＼と團扇を使ひながら、

「今晚は」と聲を掛ける者がある。此方でも挨拶をして通つた。

到頭、村外れ迄行つて、又引回すことにした。

戻路にも、途中迄同じ道を執つた。兩方竹藪で三歩先が分らぬやうな、眞暗な道が一丁餘りつゞく。それを抜けると、寺の裏である。

鐘三は暗がり歩いて居る間に、一二度背後で足音を聞いたやうな氣がし

た。が、明るみへ出た時には、誰一人随いて来ない。不思議に思ひながら、自宅の門へ着く迄、幾たびとなく振回つた。門前にイみながら、最一度見廻したが、ぼんやり一面に明るいはかりで、圃の中には人影らしいものも見えない。母屋は大戸が卸してある。庭の木戸を開けて、座敷の口から上つた。一旦座敷の中へ這つたが、燈火をとぼす氣にも成れぬので、又椽側へ出て来た。其儘ごろりと仰向けに倒れた。

今朝、大津の宿を立つて、栗津ヶ原の松並樹を歩いて居たことが心に泛んだ。が、間もなく、うとくと寝附くらしい。

不圖誰やら自分の名を喚んで居るやうな氣がして、起直つた。手の甲で眼を擦り、四邊を見廻したが、

「誰だい？」

何やら扉の外で返辭をした。それが女の聲らしい。

鐘三は不意に飛上つて、下駄を突掛けながら庭の木戸を開けた。四邊を凝

乎と透して見て、

「あ、お前か。」

かう言つたまゝ、少時女の様子を窺つて居たが、「さア這入れ。」

おしほは柿の樹の下に立つたまゝ、隠れる様にして、出て来ない。

「如何したんだな」と鐘三が訊く。

「え」と、口の中で言ひながら、やつと出て来た。

鐘三の背後に随つて、そつと坪の内へ這入つたが、椽の端に腰を掛けたまゝ、上へは上らない。

「何だ、上つて来ないのか」と鐘三は椽の上に突立つたまゝ言つた。

「え」と、何やら落着かぬ様子で、眞暗な座敷の中を覗く様にしながら、「家の人達は何處へ行きやアしたいも。」

「うむ、二人とも居ないやうだが」と、闕の上へ尻を下して、障子の枠に凭れながら、「大方うかれ節でも聞きに行つたのだらう。お前は見なかつたのかい。」

「あゝ、お鳥さんには逢ひました。」

「それぢや、矢張左様だ」と言いながら、凝乎と女の様子に眼を着けた。おしほは下を向いて、自分の手許を見詰めたまゝ、もぢくとして居る。

少時二人とも言葉が途切れた。

昔此女が此處へ忍んで来たのは一度や二度ではない。が、あの夜、あれだけ言つても振切つて歸りながら、今夜自分から逢ひに来た。鐘三には、此女の心持が好く酌取れない。

「如何したんだな。え、何爲に来たんだい。」

わざと突慥食に言つて見た。

おしほはつと目を上げて相手の顔を見返したが、直に又其眼を伏せて、「此間の晩、あんな風にして行つて仕舞やしたで、貴方が怒つてやアすのぢやないかと思つてなも。それに——」

鐘三は何か言はうとしたが、又思ひ回して、相手の言葉に耳を傾けた。

「それに」とやゝ口籠りながら「お重さんに訊くと、貴方は何處かへ行つて仕舞つて、何日迄も歸つて見えんさうぢやし——あの晩言やした事も有るで、私は本當に如何なることかと——」

かう言ひながら、おしほは段々俯向いた。「本當に、私が悪いと思つて——」

「お前が悪いことはないさ」と、少時女の頸筋から顎の邊りを見守つて居たが、「何かい、お前お重に會つて何か聞きやしなかつたかい。」

おしほはおづ／＼顔を上げた。「何をなも。」

「うむ、聞かなきゃ可い、聞かなきゃ、それで可い」と、遽て、打消した。「それで何かい、お前は、今夜、わざ／＼それを詫びに来たのかい。」

「えい」と、おしほは何氣なく言つた。不圖男の不興げな顔を見て、急にどぎまぎしながら何とか言ひ繕はうとしても、何と言出して可いやら解らない。

又、そつと其眼を膝の上に落した。

鐘三も、こんな女に對して皮肉な物の言方をしたのが、今更可哀相に成つた。

此女には、今夜自分で如何して此處へ来たかと云ふことさへ言へない。只此方から言つて遣れば——強て言ひさへすれば、何處迄も隨いて來る女には違ひない。それも知つて居る。が最うそんな事を言つて見る氣はない。只、おぼろ月の夜にまぎれて忍んで來た女と、燈火も點さぬ椽側に相對して坐つて居る。互に相手の息遣ひを耳にしなから、黙つて坐つて居る。只、それだけに——其刹那の心持に取返し難い一生を込めて味ふより外はないかも知れない。

稻妻はいよ／＼繁く、其たびに薄白い空がぱつと明るく光つた。女はむづ／＼と身體を動かした。

先刻から、おしほは何やら言ひた相にして、もぢ／＼して居たが、やつと顔を上げて、

「もし」と喚んだ。

「何だ」と、鐘三も眼を上げた。

おしほは男と眼と眼が合ふと、急に勇氣が擡けたと見えて、まご／＼しながら、又顔を背向けた。鐘三はそれを見て齒搔ゆいやうな氣がした。

「何だい、何か言ふ事が有るなら言つて御覽な。」

「え」と言ふだけで、後が續かない。

鐘三は不圖此女が本當に自分の心の中を言出したら、如何しやうと云ふやうな氣がした。心の中を打明けて、身を投懸けて來られたら、俺は如何するだらう——如何することも出來ない。俺には、他の女の手を執るやうな心持で、此女の手を執ることは出來ない。二人の間には、最一人別の男が立つて居る——其男の子供が立つて居る。俺は千人の男を知つた女の側にも、平氣で臥せることが出來やう。只、此女だけには——それが出來相もない。

此女が物を言はぬ——自分の思ふことを自分で得言はぬ。俺のためは、却てそれが仕合せかも知れない。

が、一旦言出したら——女の方から思切つて口を切られたら——俺はそれ

に抵抗することが出来るだらうか。それをも無下に斥けるだけの力があるだらうか——無い。俺には無い。

只女の一言に繋がって居る。

鐘三は見ぬ振をして、そつと女の様子を窺つた。おしほは寝巻のやうな、よれ／＼に成つた浴衣の上に、紫縞子らしい腹合せの帯を引被けたまゝ、古い雪駄のやうな物を穿いて居る。昔好くこんな服装をして忍んで来たものだ。此女が若し今夜二たび家へは歸らぬつもりで出て来たのだとしたら——それを言出し兼ねて居るのだとしたら——

鐘三は急に胸騒ぎがして来た。

「ね」と前へ乗出して、「お前は——家は如何して来たか。」

「え？」とおしほは只顔を上げた。

「家の人達は——小父さんや小母さんは如何して居たんだな。」

「あゝ、あの人達かな」と漸と解つた様に木戸の口を振り回りながら、「阿父

さんは宵から出て行きましたし、阿母さんは最う寝て居たやうぢやつたがなも。私は自分の部屋へ這入つた振をして、裏口からそつと脱けて来たて——」

「左様か」と鐘三はほつとした。少時して、

「お前は何かい、阿父さんや阿母さんを如何思つて居るんだい」と訊いて見た。おしほは下を向いたまゝ、返辭を爲ない。又言葉をつゞけて、「今、最一河兩親を棄て出て来いと云つたら——お前は能う来んだらうね。」

おしほはだん／＼頭を下げて、前髪が縁板へ擦る程に成つた。何うやら涙組んで居るらしい。

「え、如何したんだい。」

鐘三はかさねて意地悪く訊いた。

「あの人達も」とやう／＼言ひ掛けて躊躇つた。おしほの聲は泣いて居た。

「あの人達も、近頃は、大分歳を取りましたなも。それに——」

「それに？」

「餘まり私が苦勞ばかり掛けても——」

「左様さな」と鐘三も腕組を解いて坐住ひを直した。おしほの心根も憐れに可憫らしい。が、それで如何しやうと云ふのだらう。不圖又皮肉な言葉が心に泛んだが、それを言つたところで始まらない。

ごろ／＼と丑寅の空に方つて、遠雷の空鳴りがした。稻妻はいよ／＼勢を得てはたゞめく。近頃の天気では、それが毎晩のことなので二人とも自分々々の考へに沈んだまゝ、氣にも留めない。

「併し何だらう」とやがて鐘三が言出した。何やら一人て笑ひながら、「まさかお前許の親達が承知して、最一度お前を俺に呉れも爲なからうからな。え、如何だい。お前は如何する氣なんだらう。」

おしほは窃と男の顔を偷み見た。

やゝ有つて、「私も誰とて相談する人が無いてなも。貴方が」と言ひ掛けたが急におろ／＼聲に成つて、「貴方でも力に成つてお呉れやさな、私は——私

は——」と言ひながら板の間に突伏した。

鐘三は黙つてそれを見て居た。

此女が自分を力にして居る——此女をこんな境遇に陥入れた自分の外には、此女の手頼る者が無い。何と云ふあはれな身だらう。併し自分とても如何も仕様が無い。如何もして遣り様が無い。

不圖、「尼寺へ行け」といふ言葉が心に泛んだ。ハムレットはオフエリヤに對して、尼寺へ行けと言つた。あゝ、尼寺へ行け、尼寺へ行けよ。男が女に對して言ふ最後の言葉は、此外に無いかも知れない。

鐘三は閉ぢて居た眼を開いて、見るともなく女の脊から脇腹へ掛けて眺め遣つた。併し——生きた女に對してそんな事が言はれるものでない。

尤も泣くだけ泣けば涙は納まる。おしほも、やがて涙を拭いて起上つた。一二度鼻を吸りながら戸外を向いて、凝乎と暗がりを見詰めて居る。

だん／＼色の濃い雲が空一杯にひろがつた。やがて冷つこい風が吹いて

来たかと思ふと、ばら／＼と大粒な雨が庇に落ちた。途端に土藏の裏邊りて飛上るやうな雷が一つだけ鳴った。

二人は顔を見合せた。

「雨だぞ」と言ひながら、表の街道を二三人走り出した。俄に村の中ががや／＼と騒つき始めた。

「私最う歸りますわな」と、おしほは中腰に成つて空を見上げた。

「うむ歸るが可い。」

かう言つて鐘三も立上つた。

「又來ますてなも」と、おしほはまご／＼しながら相手の顔を見上げて立つて居た。未だ何やら言ひたい事が氣に懸るらしい。

「何だ、其處迄送つて遣らうか。」

「え、一人て可えわな。又誰か來ると不可んでなも」と、連れて、裾を端折りながら駆出さうとした。

「可いやな、其處迄だ」と言ひながら、鐘三も一緒に庭へ下りた。

二人は並んで門迄出た。

「最う此處で宜しいわな」と、二たびおしほが斷つた。鐘三は返辭をしなかつた。

雨はばら／＼と來たばかりで一、二寸小止みしたが、雲の脚は早い。電光はさ／＼と閃いて、圃中の小徑を照した。雷の音は殷々／＼ととゞろく。

「あゝ」と、鐘三は後から來る女に聲を掛けた。「長生さをしろよ、他の事は可いから長生さだけはしろよ。」

おしほは少時黙つて居た。

二、三步行つてから、「何故なも、何故そんな事言やすのぢやなも。」
「何でもないさ。只不圖左様思つたから——何でも無いんだよ。」

やがて二人は村の入口迄來た。
「ぢや、最う行けよ。」

「え」と言ひながら、おしほは不安相に相手の顔を見上げて居たが、「それでは、何うも有難う御座いました。」

「うむ。」

鐘三はそこに突立つたまゝ、垣根に添うて、小走りに駈けて行く女の姿を見送つて居た。やつと、それが見えなく成つてから踵を回した。

又大粒な雨が降つて来た。鐘三は雨に濡れながらのろ／＼と歩いて戻つた。椽へ上ると、突然座敷の真中にどたりと俯伏せに成つたまゝ、倒れた。其儘、何時迄経つても起上らない。

びしや／＼と屋根も拉げる程の大雨に成つて、家のまはりには、草木が大風の吹くやうな音を立てた。其間雷鳴はだん／＼間遠に成つて行く。

十二

次の朝、日も高く成つた頃、鐘三は楊子を啣へながら井戸端へ出て来た。圓

い石の上に蹲むだまゝ、凝乎と目の行く方を眺めた。井戸館の向ふに小さな胡瓜の棚があつたが、昨夜の雨にへし潰されて地面に轉つて居る。土は未だ水氣を含んで、蚯蚓が一疋其上を匍つて行く。

「さ何を爲とるのぢやえ。さつさと歩まんのか」と、子供を叱る癩高な女の聲がした。

不圖、鐘三は頭を上げた。お重が門の下に立つて、後からよち／＼跟いて来る嘉代子を待合せて居る。昨宵とは打つて代つて、びつしより露に濡れた草履穿きに、白の腰巻の下から、ぐん太い脛を覗かせて、手には茄子だの胡瓜だのを入れた芋振籠を下げて居る。嘉代子も赤い毛のちよろ／＼と生えた蜀黍を両手に抱えて居るが、路でそれを落して又拾ふなど、なか／＼手間が取れるらしい。

「だから母ちゃんが持つて上げると云ふのに——そんなに何度も落すなら、さア此方へ出してお仕舞ひ。」

「やだ、私が持つんだ」と子供は腹這ひに成る様にして渡さない。
「それ、又そんなに落して」と、一つ、土を拂つて持たせながら、「早く被入しや」と、邪慳に引立てた。

其途端に、お重は井戸端へ眼を遣つた。が、柱の蔭に成つて、鐘三の姿は目に附かぬらしい。其儘、子供の手を曳いて、土蔵の入口へ近づく。

「お絹さま、お坐てやすかな」と、戸外から聲を掛けた。

内側からも返辭をしたらしい。

其儘、入口の闕に腰を掛けて話込んだ。片手で子供を制しながら、何やら身を入れて饒舌つて居るらしい。が、此處迄は間遠で聞えない。

鐘三はほつとして立上つた。お重が向ふを向いて居る隙間に、べちやくと顔を洗つて、こつそり元の座敷へ歸つた。古い一閑張の机に凭れたまゝ、静乎と眼を瞑つて居ると、お鳥が来て、

「お膳を此處へ持つて来ましょか。彼方で上りやすかな」と訊く。

「あゝ、行くよ」と言つて立上つた。北向きの板の間で、いつもの椀の蓋を取りながら、「お前は彼方へ行つて呉れ、一人て可いから」と、お鳥を追ひ遣つた。お鳥は何遍言はれても、毎朝給仕をする積りて居るらしい。

一時間ばかり経つた後である。

「祐様は見えんかなも」と言ひながら、お重が戸口を這入つて来た。

「今一寸出て行かれたがなも。」

お鳥は織機の上から胡散相に相手を見ながら返辭をした。「何ぞ用かな。」

「え、祐様が見えな貴方でも可えわなも。あの——今お絹さまに訊いて来たが、餛飩粉を三升許り貸してお呉れやさんか。」

お鳥は不快な顔をした。うぢく、と織機を降りながら、「餛飩の粉が未だ有つたか知らんてな。」

「一昨日水車舎から持つて来たんぢやないかな。お絹さまが左様言つてぢやつたが」と、お重は透さず言つた。そして、上櫃に腰を卸した。

鐘三は、二人の話に苦い顔をした。此儘奥へ這入るのも、後れたやうな氣がするので、わざと背方を向きながら巻煙草の薄い烟を眺めて居た。お重は脊中を向けたまゝ見回りもしない。やがて、お鳥は粉末だらけの手に、小麥の粉を山盛りにした桶を持つて、土間の隅から出て來た。

「何ぞ容器が有るかな。」

「あゝ、つい周章で忘れて來たが、一遍それを貸してお呉れやすな——後から直ぐ届けるで可えに。」

「左様かな」と、お鳥はしぶく容器ぐるみ渡した。

お重はそれを受取つて傍に置きながら男と顔を見合せて、にやりと笑つた。

「鐘様！」

鐘三は口から巻煙草を離して相手の顔を見返したまゝ、「何だな。」

「何でもないがなも」と、にた／＼相好を崩して笑ひながら、「如何てした旅

行は面白かつたな。」

「うむ面白かつたね。」

わざと勢よく言つた。「あれから龜山へ廻つて、伊賀の上野から月ヶ瀬笠置と經て奈良迄行つたよ。」

「へえ」と、お重は何やら感心した體で、「伊賀の上野と云へば鍵屋の辻つて、昔敵討のあつた所ですわね。今でもちやんとして有るんですか。」

「今でも有るさ」と、相手の顔を見てにや／＼笑ひながら、「それから、戻路には大阪へ廻つて見たよ。お前の元居た樓の名前をおぼえて居たら、餘程這入つて見やうかと思つたんだが。」

「へえ、曾根崎へも被入したんですか」と、お重は背後を向いて、今這入つて來た男に席を譲りながら、「祐様暑いのに、えろ精出すぢやなも。」

「うむ」と、不精無精に言つたまゝ、祐作は上框に尻切絆纏の尻を卸した。野良から上つて來たものらしい。

少時二人の話が途絶えた。やがて祐作は腰から糞入を抜いて、吠の底をはたく様にして、粉末に成つた煙草を煙管の雁首に詰めながら、きよと／＼臺所を見廻した。

「燐寸かな」とお重が取つて遣つた。「何う私が點けて上げませう。」

祐作は言はれる儘に點けて貰つた。一服吹つて鬨の上には吹殻をはたきながら、「何ぢやい、曾根崎の話をして居つたぢやないかえ。」

「えい。」

「ありや前一年の火事で焼けたと云ふことぢやぜ。」

「左様ぢやさうななも。何しろ私の居たのは最う十年も前ですから、大分變つたんでせうよ」と言ひながら、相手に成るまいとして、つと側を向いた。

祐作はそれを追掛ける様に、ぢろ／＼女の横顔を見て居たが、「併しあれは如何したえ、岩公は？ 未だ曾根崎に居ると聞いたが、近頃は音便でも有つたかえ。」

お重は返辭をしなかつた。

祐作はなほ執念くつゞけた。「先方ぢや變な女と一緒に成つて居ると云ふ話ぢやない。此間、お前許の阿母が来て、ぼん／＼憤りながら、本當に義理も人情も知らない奴ぢやと言つて居つたが、左様かえ。實際そんな女が出来たのかえ。」

「さ、如何ですか男なら女の一人や二人有るんでせうよ。」

つと立上つて、お鳥の織機の側へ行つた。「毎日精が出るなも。」

「えい」とお鳥も梭の手を止めた。

祐作は両手を頸にかつて、ごろりと仰向けに倒れながら、「併し男も薄情なもんぢやない。あれだけ苦勞して貰いても、終ひにやそんな事に成るんだから——阿母が憤らせるのも無理はないわえ。」

岩公と云ふのは、鐘三もかねて知つて居る。始めてお重を見たのも、お重が此男を伴れて、静岡の二丁町から逃げて來た時である。其後しばらくお重の

家にごろ／＼して居た。お開の話では、何でも静岡に名代の下駄屋の次男とかで分けて貰つた身代も店もすつかりお重に入れ上げて土地にも居られなく成つて女に隨いて来たのだそう。来て見りや女の家の生計の樂な筈はなし、何時迄厄介にも成つて居られぬので、いろ／＼小商買を初めて見たが、何うも思ふ様に行かない。折角お開夫婦が苦面して呉れた資金も、其たびにすつて仕舞つた。此男に對しては、當人のお重よりも、兩親の方が一生懸命に成つて居たので、お重は只即かず離れずに遇つて居たものらしい。て男の方でも、一つは女の機嫌が取りたいのと、又一つは兩親の前も面目ないので、故郷へ歸つて金子を拵へて來ると云つて出て行つたが、三四箇月経つても戻つて來ない。だん／＼様子を探ると、男は故郷で謀判をして、監獄へ入つたと云ふことが知れた。それ聞いて、お重が何んな心持をしたかは分らない。兎に角男の残して行つた借金も、片も附けなければ成らぬので、二たび大阪へ身を賣つたのは、それから間もないことと有つた。これだけの事は、鐘三も聞いて知

つて居る。が、あれから又男が女の跡を追つて、大阪へ行つたなぞと云ふことは知らない。殊に祐作の話の様子ぢや、今でも未だお重と手が切れずに居らしい。それも初耳である。

祐作は仰向けに倒れたまゝ、兩手に團扇の柄を廻して居たが、むつくり頭を掻けて、「此間の晩は、お前許でひどい喧嘩が有つたさうぢやない。一體如何したんぢやえ。」

お重はちらと振回つた。其はづみに鐘三と眼が合つた。鐘三は毎も食後に飲む牛乳の洋盃を口から離して、凝乎と耳を傾けて居た。

「新田のお徳やが、嗚鳴り込んで行つたと云ふ話ぢやが、本當かえ」と、祐作はつゞけて言つた。

「あゝあれか」と、お重は強ひて笑ひながら、「あれは彼んな様な事さな。」
 「だつて、お前、あんな奴に相手に成ると云ふ事が有るかえ。あんな狂人は言ふだけ言はせて置きや可えさ」と、何やら一人て吞込みながら、又ごろりと仰

向けに倒れて、「併しお徳やも氣の毒なもんぢやない。あれで餘程自分の亭主が好え男のつもりで、お前に寝取られやせんかとやきもきして居るんぢやてな。何も男早りがするぢやなし、此方やあんな男一人を相手にして居る譯ぢやないのさ。な、お重さ。」

おひやらかす様に言つて、少時黙つて居たが、やがて又、「如何ぢやろえ。こんな話を岩公に聞かせて遣つたら、餘まり好い氣持も爲んぢやろてな。」

誰も返辭をするものはない。
鐘三は牛乳の洋盃を取上げて、ゆつくり／＼飲みながら凝乎と耳を澄した。こんな話もうす／＼聞いては居た。お重が歸つて來てから、村の誰彼に關係をつけて、手切金を取つたとか取らぬとか大分喧ましいことも有つた。が目のあたりこんな話を聞くのは堪らない。又、こんな話をする祐作も如何したのであらう。何だか、すべてが自分のフォアランナアらしい。そしてお重は、何日かの夜自分に對して言つたのと同じやうな事を言つて、同じ様にそれ等

の先輩を抱いて遣つたに違ひない――

鐘三はそつと四邊を見廻した。庭鳥がく／＼と鳴きながら、雨に掘れた小石の間を求食つて歩く。少時は、お鳥の手から起る稜の音を外にして、村中に物音一つ聞えない。

何時の間にやらお重は裏口から廻つて、にた／＼笑ひ掛けながら、縁の端に腰を掛けた。例の笑ひ方で、總てを胡麻化さうとして居るらしい。

鐘三はつと投出して居た足を引いた。背後の柱に凭れて、まじ／＼と女の顔を見守つたまゝ、何とも言出さない。

「あーッ」と不意に兩手を舉げて、大きな欠伸をしながら、祐作が立上つた。「何れ、又一まはり廻つて來るかな」と、捨臺詞を残して、のそ／＼と戸口の方へ出て行く。

鐘三は思はず其方へ眼を遣つた。やがてくるりと振向いた時、不圖お重と眼を見合せた。お重は凝乎と男の顔に眼を附けて居たものらしい。

少時、其眼を見返して居たが、急に口許を弛めて、
「ね、岩さんと云ふのは、未だ生きて居るのかい」と訊いて見た。其後から直に後悔して、取返せるものなら取返したいやうな氣もした。

「岩公ですか」と、お重は別に氣にも留めて居ないと云つたやうな様子をして、「え、未だ生きて居ますよ。それが如何か爲たんですか。」

「いや、如何もしないさ」と、どぎまぎして眼を反しながら、「只ね、お前達が未だ左様して、互に音信を仕合つて居るんなら、いつそ夫婦に成つたら如何かと思つてね。又如何して今迄一緒に成らずに居たんだい。」

「え、それがな」と、眞當面に相手の顔を見返したまゝ、にや／＼笑つて居たが、「矢張、私が左様云ふ氣に成れんのですね」と、早口に言つた。少時して、「だつて、貴方も左様ぢや有りませんか。側から見や如何しておしほさんの様な好い人を早く貰つてお遣ん被成ないかと、不思議に思へますよ。」

「俺のは違ふさ。」

「いゝえ、違ひません」と、お重はきつぱり言つた。が、何を想出したのやら急に聲を小さくして、「それは左様と、おしほさんの縁談が決つたが知つてかな。」

鐘三ははつとして眼を睜つた。

やゝ有つて、「へえ、そりや本當かい。」

「何だ、な顔色を變へて」と、お重は小憎らしい程落着いて見せて、「貴方でも、左様聞くと、未練が残るぢやらうなもの。」

「うむ」と、鐘三は苦笑ひに紛らした。つとめて平氣を裝つて居るつもりでも、矢張顔色に出るものと見える。それにしても、おしほの縁談が決つた――昨夜此處へ忍んで来て、泣いて行つたおしほの縁談が――何うも解らない。

何うもそんな筈が有らうとは思へない。

「ね、そりや本當の話かい」と、二たび同じ事を訊いて見た。

「本當ですとも」と、お重も眉を顰めながら、「私が嘘言つたつて仕様がな。い。ですが、これは随分前から始まつた話らしいんですよ。貴方が油斷をしてぢ

やから、こんな事に成つて仕舞ふんでさ。」
かう突離す様に言つて、少時男の容子を見守つて居たが、「私だつて、こんな話を聞きや好い心持はしませんよ。随分あの子のためには、これ骨を折つたんですからね。」

鐘三は返辭をしなかつた。

お重も不圖言葉を途切らして、まじ／＼と相手の様子を見守つて居たが、男が本當に動かされて居るのを見ては、自分も鼻白むやうな氣がして、何とも言出し様がない。やがて、

「因縁ですわね」と言つて見た。

鐘三は尙且俯向いたまゝ黙つて居る。

それよりも旅で面白かつた話でもして下さらないか。何れ私どもへもどつさりお土産があるんだらうと思つて待つて居たんですよ。」

「左様さな」と鐘三も薄笑ひをしながら顔を上げた。「何も土産は買つて來

なかつたよ。あゝ、こんな物が有るが、それでも好きや持つて行くさ。」

かう言つて立上つた。奥へ這入つて途中で買つた柳の手下げの中を掻捜しながら尉と姥との奈良人形を二つ持つて出て來た。

「へえ珍らしい物ですわね」と手に受けて、刀の冴えが目に見えるやうな粗削りの人形の顔を右視左視して居たが、「こりや、何に爲るんですか。」

「子供にでも遣るさ」と言つたが、又出直して、「あゝ云ふ稼業の女は、好くこんな物を集めて居るんぢやないのかい。」

「えゝ、そりや犬張子などを集めて居る女も有りましたけど。」

「だから、お前に買つて來て上げたのさ。」

「何うも有難う」と言つて、お重はわざと頂く眞似をした。

不意に門口で嘉代子が泣出した。今迄大人しく一人て遊んで居たが、俄に火の着いた様にわめく。毎もそんな時には何を措いても駆出すお重が落着いて澄まして居る。

「行つて遣らないのかい子供が泣いてるぢやないか。」

「えい」と言ひながら漸と尻を上げた。

如何したのやらお重が側へ行つても子供はなか／＼泣止まない。何やら突慥食に叱つて居る聲がした。少時してお重は二たび子供の手を曳きながら戸口を這入つて来て、

「ぢや、最う歸りますわな。」

「うむ」と鐘三も振向いた。

「今の事はなも」と何やら手ぐらひをしながら、「最一遍好く考へて置きやすな。今の間なら未だ如何にか成らんことも無いでせうからね。」

一人て點頭ながら上框の小桶を取上げて、「ぢや、これは後から届けるてなも」とお鳥にも挨拶をして出て行く。

鐘三はそれを見送つたまゝ、ぼんやり坐つて居たが急に目が眩むやうな気がして、つと立つて奥の間へ這入つた。少時座敷の真中に突立つて居たが又

椽側へ出て障子の下に蹲つた。

昨夜のことだ。おしほが此處へ來たのは只昨宵のことだ。其おしほの縁談が決つた——決つたものならおしほも知らずに居る筈はない。既に縁談が決つて、自分も承知して居るものが何爲にわざ／＼此處へ泣きに來た——泣いて見せに來た？ 知つて居ながら俺の前に隠して居たのだとすれば——隠して泣いて居たのだとすれば實際大膽な女である。あの女がそんな女に成つたのか——尤もそれを言ふつもりで來ても言へなかつたのかも知れない。言ひたいと思つても言へないこともある。が、それにしても、それ程の事を到頭打明けずに戻つて行く——隠し通して居られるとすれば、矢張あの女の心持は解らない。

鐘三は彈かれた様に立上つた。

「如何するのだ。俺はこれから如何したら可いのだ。」
直に又如何も仕様がないと云ふ氣か附く。其儘ぐづ／＼と下に坐つた。

一時間餘り左様して居た。やつと立上つたかと思ふと、両手で頭を抱へたまゝ、椽側を往つたり來たりした。何を爲て居るのか、自分では知らずに居るらしい。

不圖立停つた。其儘下駄を突掛けて、つか／＼と木戸を出て行く。

やがて村の裏を通ふ街道を傍眼も振らず歩いて居た。おひ／＼日盛りになり。成つて來たので、一時往來が途絶えるらしい。街道の上には、犬一疋目に觸れない。只、一筋ひろい新道が東から西に向つて真直につゞく。其道の躑まるところに、長い坂が見へる。夕立のあとで空気が澄んでゐる、だけに平常よりは一層近く見える。

だん／＼坂の下へ近づいた。近づくに伴れて、何爲に行くのだと云ふやうな氣がして來た。坂を登れば直に線船の橋である。其橋を渡れば例の一軒家である。一軒家へ何を爲に行く。今更それを見て置いて、何に爲やうぞ。

鐘三はだん／＼足を緩めた。そろ／＼と坂の中途迄上つたが、如何しても

足が進まない。其處に突立つたまゝ、坂の上を眺めて居たが、つと側へ反れて、土手の中腹へ降りた。土手には、一面に短い芝草が生えて居る。それを斜に切つてずん／＼登つて行つたが、一叢の灌木を見附けて、其蔭へ倒れる様に尻を落した。

「矢張女だ。それが女だ！」

途々考へて來たことを二たび繰回して言つて見た。あの女が片方で縁談を取極めながら、それを隠して置いて、此方へもちよつかひを掛ける。二道を掛けられたと思へば腹も立つ。嘘を言つて――俺の前に嘘を言つて、此方の心を迷はすやうなことを言つて居られたかと思ふと堪らない。が、それが女かも知れない。百年の苦樂他人に據る女の身に成つたら、生活の保證を得ると云ふことについて、男よりも敏感なのは固より其所であらう。おしほも其保證が欲しかつたのだ。男を思ふ心に虚偽はなくとも、目の前に突出された保證を斥けるだけの力はない。それが女だ――女に憎む所はない。

昨宵おしほが椽側に突伏して泣いて居た姿がまざくと眼に映つた。そしておしほの正體を見たやうな氣がした——女と云ふものゝ正體を。あゝ、女に虚偽はない。女の泣く涙に虚涙はない。

左様思ふと共に、いよゝ女を失つたと云ふやうな氣がして來た。いよいよあの女を失つた。永遠に失つた。あの女はこれから俺の知らない所へ行つて、知らない男と夫婦に成つて俺の見て居ない所て年を取る。幾人もく子を生んで子供達にせがまれながらだん／＼瘠せて行くのであらう。今度俺と逢ふ時には、あの顔に皺が寄つて頭には汚ない白髪が生えて居る——白髮の婆に成つて居る。それを思ふと俺には堪らない。思つて見るだけでも堪らない。

「尼寺へ行け、／＼。」

鐘三は横に倒れて、しつかり草の根を掴んだまゝ、聲を出して叫んだ。あゝ、女は皆戀をせよ。そして、それが濟んだら尼寺へ行け！

空には、白い雲が一片鳥の落毛の様にぼつかりと浮いて居たが見る／＼消えて見えなく成つた。草叢の中ではさま／＼な蟲が雨の降るやうに鳴いて居た。が鐘三は青草の上へ俯伏せに成つたまゝ、何時迄も起上らない。

だん／＼日も西に廻つた。街道の上にも、ちらほら通行人が見え出した。其後から二三臺つゝいて重い荷を積んだ荷車がどゞどと橋板の落ちるやうな音をさせながら、緑船の橋を渡つたが、鐘三はそれも知らない。

恰度其荷車が町迄行つて荷物を卸して戻つて來た時である。やつと鐘三は起直つた。がら／＼と空車を曳いて行く音を耳にしながら、ぼんやり青田の上を見詰めて居た、やがて、不圖氣が附いた様に立上つて、のそ／＼土手の上へ登つて行く。

土手の上からは、川一筋距て、橋の袂の一軒家が見える。先づ見覺えのあの白壁の土藏が目につく。鐘三はそれを見ながら、川について近づいた。此方側の橋詰迄來て、一寸躊躇らつたが、又思ひ直して、一足づゝ橋を渡らうとした。

ゆらくと橋板が足の下に揺れた。

土蔵の前の明地に蓆を敷いて、主人夫婦は麥の穂をこなして居た。主人の打下す棍棒に伴れて若い上さんも稍細目なのを振上げた。交互に振上げては打卸す棒の下に、大麥の粒はこぼれて飛んだ。かうしてだん／＼麥の穂がこなれて行く。それに伴れて二人はぢり／＼と其周圍を廻つて行つた。

軒の下に子供が遊んで居る。一人は五つ許りの男の子で、一人は其妹らしい。二人とも泥まみれに成つて、地面に這ひつくばつて居る。兄の方は葉鐵の鏝で土を秤りながら、せつせと手桶の中へ運んで居たが、妹が手を出して貸せと云ふのをなかく／＼渡さない。妹は聲を上げてわめく。

「小さい者を虐めるぢやないぞ。」

主人は棍棒を振上げたまゝ、振向きもせずと言つた。上さんもてんで氣に留めないらしい。

鐘三は土手の上に立つたまゝ、少時それを見て居た。相手が仕事で夢中に

成つて居るだけに、何うも聲を掛ける氣にも成れない。で、其儘通り過ぎやうとして、背後を見い／＼川について下つた。

不意に女の兒が聲を上げて泣き出した。今度は兄が打つか如何かしたと見えて、なかく／＼泣き止まない。わい／＼火の附いた様に泣きながら、母親の居る方へ這つて來やうとした。

「ま、何故泣かせるぢやえ。」

上さんも手を休めた。そこに棍棒を捨て、置いて、懷中をはだけながら子供側の側へ近寄つた。

「さ、あつぱい上げるて泣くぢやない」と突然抱き上げて乳房を啣ませながら、椽側に腰を掛けた。そして、片手に被つて居た手拭をとつて、頸筋から額の汗を拭つて居る。此女の顔に比べて、胸の邊りの色が極めて白い。

鐘三は思はず立停つて見て居た。

おしほと二人で、此家に隠れて居た頃には、上の兒は上さんのお腹の中に居

た。あの上さんが未だ嫁に來たて、子供の様なうぶな顔をしながら、大きな腹を抱えて居るのが可笑しかった。それが最う二人の子持に成つて居る。二人の子持に成つた外には何一つ變つたこともないらしい。おだやかな夜が明けて、穏かな日が暮れる。夫婦の中で、良人が妻の心を疑つたこともなく、妻が良人の心を危ぶんだことも有るまい。

鐘三はそろ／＼と長い堤の上を歩いて行つた。間もなく、川が大きく曲つて流れるところへ來た。

夕日が川の水の上にきら／＼と照返して居る。それを見詰めたまゝ、静平と足を留めた。何とも云はれぬ寂さが込上げて來るらしい。

十三

鐘三はのつそり門を這入つた。門の中は最う薄暗く成つて居た。殊に土藏の横手から母屋の裏へかけて、

一面に茂つた竹藪が、こんもりと黒く見えた。風の止んだためか、笹葉一枚動かない。

見ると、倉の戸口から燈火が射して、何やら人だかりがして居る。黒い影が出たり入つたりして各自に何やら喋舌つて居るらしい。どうも普通ならぬ様子である。

鐘三は急に胸騒ぎのするやうな氣がして、遮て、戸口へ近づいた。倉の底には五分心の洋燈が釣してある。其下に、隣家の亭主と阿母のお通と云ふのが中腰に成つて奥の方に寝て居る。お絹の容態を見守つて居るらしい。枕頭には、お鳥が坐つて居る。お絹の顔は洋燈の光が弱いので、ぼんやりとしか見えないが、折々苦し相に身を藻掻いて、ぼつと溜息を吐く。其たびにお鳥が兩手で肩を抑へて居た。

鐘三は石段の下に立つたまゝ、他人の事のやうな氣がして、ぼんやりそれを見て居た。倉の中に居る人達も取紛れて、誰一人這入れと云ふものもない。

其時背後からお關が兩手に金盃を受けて、ばた／＼と駈けて來た。ぢろぢろ振回つて見ながら、

「鐘様かな。何ぢやな、そんな所に立つて？ 阿母様の鹽梅が悪いぢやないかな。さ、中へお這入りなさい。」

「うむ」と、鐘三も一足前へ出たが、「餘程悪いのかい。」

「夕方から容子が變だと云ふので大騒ぎぢやないかな」と、金盃を闕の上に置いて、「私も一寸桶を返しに來て吃驚して仕舞つた。今、祐様に醫者殿へ駈着けて貰つた處ぢやが、ま、一遍中へ這入つて、阿母様を見舞つて上げやすな。」

鐘三は黙つて下駄を脱いで上つた。

「ま、歸つて見えたなも」と言ひながら、隣家の婆さんも側へ寄つて通した。

お鳥は自分の坐をゆづつた。

鐘三はそこに立つたまゝ、病人の寐顔を見卸した。お絹は少し樂に成つたと見えて、落窪んだ眼を閉ぢたまゝ、すや／＼と寝入つて居る。長年持病に責

められて來たので、肋骨が一枚々々數へられて、息をするたびに、それがあッぶあッぶ阿打つのも見るからに側々しい。

「阿母様、鐘様が見えたぞな」と、お鳥が耳の側へ口を寄せて囁いた。

「もし、鐘様ぢやが分るかなも。」

「可い／＼、起さんでも可い。」

鐘三は手を振つて止めた。そつと下に坐りながら、「大分汗を掻いてるやうだね。此汗は好いのかい。」

「え、一時むづかしい様に思つたがなも、此儘こつツと行くやうな氣がして」と、お關は小聲で言ひながら、金盃の中で手拭を絞つて、そつと病人の額を拭いて遣つた。

不意に病人が眼を開いた。表情のない眼、附て凝乎と枕頭を見上げて居たが、「お寺様はえ」と訊く。其聲が喉に詰つて出ない。

「お寺様はえ、お寺様は何處へ見えたえ」と、かさねて噎れた聲で言つた。

皆顔を見合せた。

「お寺様な」とお關が訊き返した。「お寺様つて見えせんがな。」

「今見えたと云つて居つたぢやないかえ。御住持がわざ／＼來てお呉れたと言ふ聲がしたが――」

「あゝ、あれは鐘様ぢやな。鐘様が歸つて見えたとぢやな。」

お絹は少時黙つて居た。やがて、

「あゝ、左様かえ」と言ひながら、二たび眼を睨つた。

が、何時迄も靜平としては居ない。直に又むづ／＼と動いて、瘡せた骨ばかりの手を空に振つた。

「如何ぢやな、如何するのぢやな」とお關が傍から訊いた。

「痛い、脊骨が痛す。」

「さ、それぢや一つ」と言ひながら、そつと抱えて寝返りを打たせた。序に、兩足も伸ばして遣つたが、敷蒲團が短いためか、畳の上へはみ出した。鐘三は其

蒲團に目を附けた。何うも自分が子供の時に敷いて寝た蒲團らしい。

「あゝ、彼の蒲團を着て死ぬのか。」

不圖そんな事を思ふと、急に堪らないやうな氣がして來た。氣躡な女で、何方かと云へば、世間で云ふ母親らしい母親ではなかつた。やゝ大きく成つてからは、此方は此方で勝手なことを爲るし、先方は先方で好きな真似をして、親子らしい交渉と云ふものもなく、別々の道を歩いて來たと云つても可い。が、子供の時は、随分可愛がつて貰つたおぼえが有る。此蒲團の側に坐つて、お絹は何れだけ數多い子守歌を唄つたことであらう。一緒に泣いたこともある、笑つたこともある。夜半に魔えて寝入らぬと云つては、あの骨立つた脊中に子供を負つて、一晚中門に立ち明かしたこともある。

お絹は二たび眼を開いて、きよと／＼四邊を見廻した。

鐘三は少時それを見て居たが、「何だ、何か欲しいんですか。」

「あゝ、鐘さか」と始めて見附けた様に大きな息を吐いた。「お前何時歸つて

来たぢやえ。」

「先刻から此處に居るんですよ。」

それには返辭をしなかつた。又すや／＼と寝附く様に見えたが急に、「あの時は苦しかつたない」と言出した。「それ、あの時ぢやが覺えて居らんのかえ。お前も俺も一人づゝ子供を脊負つて箱根の山を越したが途中から胡麻の蠅に跟けられて、本當に難儀をしたない。あの時のことは、一生忘れんわえ。」

誰に向つて言つて居るのか分らない。皆顔を見合せたまゝ、黙つて居た。

「途中で路銀は無く成るし、二人とも家を逃出したのぢやて、戻るにも戻られず、先方へは尙更行かれず——」

「阿母さん」と鐘三は思はず喚んだ。何を言ふのか自分にも解らないが、自分さへ知らないやうな、此女の暗い前半生の秘密を大勢の前で言出されるやうな氣がして、はら／＼して見て居られない。

お絹は其儘黙つて仕舞つた。

少時して、ほつと息を吐きながら、「俺や最う死ぬ、最うお迎ひが来たわな。」

「何だな」と鐘三は聲に力を入れて、「そんな事大丈夫だから、碇かりしてなきや不可ませんよ。」

「あい」と言つて眼を閉ぢたが、額からたら／＼と汗が流れた。「お寺様を喚んでお呉れんか。俺や何うも前方が暗いわえ——業の深い身ぢやてない。

何うも前方が暗いわえ。」

鐘三は其顔を見詰めたまゝ、何とも言ふことが出来なかつた。やゝ有つて、「あゝ喚んで上げるよ。明日に成つたら喚んで遣るからねえ。」

「お醫者様が見えたぞな」と隣家の婆さんが言つて來た。

「あゝ左様かな」とお關も立上つた。

「えらう悪い相ぢやな」と言ひながら、隣村の醫者はつか／＼と病人の側へ通つた。お關は手傳つて病人の胸をひろげた。杖から聴診器を出して、型の如く診察にかゝつたが、少時頸を傾げたまゝ、何とも言出さない。

「如何でせうなも」とお關がおそる／＼醫者の顔を見上げた。
「うむ」と言ひながら、最一度病人の眼臉を引上げて見て、「此苦しみだけは
取つて上げることが出来るが何うもな。」

かう言つてつと立上つた。お關も後から隨つて行つた。醫者は金盥の水
で手を洗ひながら、「なに、そんな事はない。今夜心配なやうなことはないが
——兎に角明日は注射の道具を持つて來やう。今夜は大抵薬で納まるだら
うからね。」

鐘三も傍に立つて聞いて居たが、何だか覺束ないやうな氣もした。が、別段
それでもと押して言ふ氣もない。

村の醫者は歸つた。恰度そこへ祐作が氷を買つて戻つて來たので、其足で
二たび薬を取りに行つて貰つた。又皆病人の枕頭へ戻つた。

其後は氷囊で冷したのでだん／＼病人も落着いた。やがて薬も届いた。
お關は隣の主人と婆さんとに禮を述べて、一先づ引取つて貰ふことにした。

祐作も走り廻つて勞れたと云ふので、一人先へ母屋へかへつて寝た。

あひ／＼夏の夜も深くて、すうと冷たい風が戸口から吹込んで來た。お關

はお巻と一緒に病人の枕頭に坐つて、團扇でそつと扇いで居たが、

「如何ぢやな、鐘様貴方も些との間彼方で横に成りやしたら——此處はお鳥
さんと私とが起きてりや可えに。」

「左様さな。」

「なも、左様しやすな。此分なら病人も大方好えてせうに。」

「ぢや、左様しやうかな」と、鐘三はぬつと立上つた。お鳥が後から走つて來
て、平常の座敷に蚊帳を釣つて呉れた。

蚊帳の中に着たまゝごろりと横に成つた。目が研えて寝附かれない。
骨肉の死!

それだけを凝乎と見詰めて見やうとした。只一人の親が死ぬ。一人の親
が——俺を生んだ親が死んで行く。あの女も矢張俺の親であつた。あの女

が如何云ふ女か俺も知らない。あの女の前半生に於て如何云ふ事をして来たのか、そんな事は聞いたこともなければ又聞かうとしたこともない。只かう云ふことだけは分つて居た。あの女も俺の様な女であつた。あの女の血は矢張俺の血であつた。假令あの女の一生に何んな後指を指されるやうな事が有つたとしても、あの女はそれを悪いと知つて爲たのではない。善い事をするにも知らずに爲た、悪い事をするにも知らずに爲て居た。あの女は悪人ぢやない。

左様だ、俺は悪人ぢやない！

鐘三はひくり起上つた。悪人と云ふのはこんな者ぢやない。つまり俺は悪人でもないのだ。それなればこそ、一度も悪人の嘗めるやうな心の呵責と云ふものを受けたことがない。俺は愧れもした、儘ならぬ浮世に拗ねもした、遺瀨のない思ひもした。併し悪人の経験するやうな地獄の火に魂が爛れるやうな苦痛は一度も経験したおぼえがない。何んな悪い事をして——

何んな罪を犯しても、俺はそれを軽く受け取つた。上ツ辻りをして通つた。只あの女は一生それを知らずに通つた。俺は知つて居る——知つて居ながら如何することも出来ない！

あゝ前方が暗い。

不圖、最前お絹の口から出た言葉が思ひ當つた。あの女も死ぬ間際に成つて——前方が暗いと言つた。俺は——俺は如何するのだ。

鐘三は暗がりの中に坐つて、疑乎と四方の壁を見詰めて居たが、堪らないやうな心持がして、つと蚊帳の外へ出た。そして庭へ下りた。

大空はひや／＼と澄み亘つて、平常よりは星が高く見えた。何んな夜にも、真夜中に一度は全く風の絶える時がある。恰度今がそれらしい。

鐘三はあらゆる物の奥に潜む言葉に耳を傾けるやうな心持がしながら、腕組をしたまゝ、何遍となく庭を往つたり來たりした。そして、同じ事を考へて居た。

善い事を爲よ！
 あらゆる疑惑や、小賢しい分別を捨て、只善い事をせよ。少しでも可いから善い事を爲よ。そして善い人間に成れ！縦しや人生は解らないとしても、人生の目的は此外にない。此外に俺の救はれる道もない。

併し俺には信仰がない。
 鐘三は大地を見詰めたまゝ、びたりと足を留めた。信仰のない者に、本當に善い事が出来るだらうか。本當に人間を愛することが出来るだらうか。が待てよ。信仰が有つて始めて善い事が出来るのではなく、善い事をして居れば自から信仰が生ずるのだ。左様だ。それに違ひない。
 此點に思ひ到つた時、鐘三は心の底から歡喜の情が湧くやうな氣がした。つか／＼と井戸館の端迄出て、兩手を高く擧げながら、凝乎と白みかけた東の空を見詰めた。
 あゝ、新しい生命——俺にも新しい生命が始まるのだ。俺はこれ迄本當に

人を愛したことがない。が、これから本當に愛することも出来るのだ。他人から取つたおぼえは有つても、他人に與へた覺えはない。が、これから本當に與へることも出来るのだ。本當の愛は忍耐である、勞働である。あゝ、俺にも明日から忍耐と勞働との生涯が始まるのだ！
 鐘三は此決心を死んで行く母親に言つて聞かせたいやうな氣がした——息ある間に言つて聞かせたい。左様思ふと共に、二三歩前へ出た。
 が眼を上げて、倉の戸口からうす／＼射して居る灯火を見た時、又其決心が鈍る様に思つた。死！死！何んなや、いゝな人間でも、死に面して、一時向上されぬ者はない。そんな時、そんな人間の決心が何時迄つゞくものぞ！
 鐘三は好く自分を知つて居た。自分の決心程當に成らぬものはない。其儘引回して、座敷の椽に腰を下した。一時間餘り左様して居たが、夜風が身に泌みて、ぶる／＼と身戰ひした。又むづ／＼と蚊帳の中へ藻練り込んだ。明方近くぐつすり寝込んだと見えてはつとして目を覺した時には、何處も

彼處も明るく成つて居た。餘程時間も遅いらしい。

鐘三は顔を洗ふ前に、先づ倉へ行つて見た。戸口に立つて、

「如何だい」と訊いた。

「え、變つた事はないがなも」と、お鳥が寝惚け面を見せた。「醫者殿も最う来てお呉れやしたぞな。」

「左様か。」

一目病人の顔を見遣つたまゝ、そこから引回して、井戸端で手水を使った。直に又枕頭へ行つて見た。

病人は併し大分容態が變つて居た。絶えず枕の上で頭をくるくると動かして居たが、鐘三が這入つて來たのを見て、凝乎と其顔の上に眼を据ゑた。誰だと言ふことが分つたらしい。何やら言はうと努めるらしく、やつと唇が動いた。そして微かな判きりせぬ音が洩れた。

鐘三は思はず前へ乗出して言つた。

「何も言はなくても可い——分つて居るから言はなくても可い。」

病人は言はれる儘に大人しく、其上の努力を止めた。少時相手の顔を見て居たが、又くるくると頸を振出した。それが午前中つゝいた。

午後の一時期である。最う頭も振らなく成つた。が、何やら顔を覺めて無理に手を肩の上へ上げやうとする。お鳥がそれを見て。

「一遍起して呉れと言はつしやるのぢないかなも」と訊く。

「左様さな」と鐘三も病人の顔を見詰めたまゝ、「ぢや、一遍起して遣つて見ろ。」

お鳥は病人の背後から抱いて、そつと起しにかゝつた。不意に、「うゝむ」と呻く聲が聞えた。

見る／＼病人の目が白く成つた。硝子の玉の様に變つて行く。

「あゝ、最うお暇乞ぢやぞな、く。」
側の者が氣立ましく喚んだ。

お絹が死しんでから三週しゅう間かん経たつた。
 ある日の夕方ゆふた鐘かね三さんは僅わずかか許ゆるりの手荷物てにものを持もつて、又村外またむられの辻つじに立たつた。
 少時しばしそここに轉ころがつて居ゐる捨石すていしを見詰みめて居ゐたが、
 「あ、又次またつぎの十字街じゅうじ迄まで。」
 誰たれに言いふともなく呟つぶいた。そして、足あしを上げあげて町まちの方ほうへ歩あ歩いて行いつた。

十字街終

大正元年十二月十六日印刷
 大正元年十二月十九日發行

十字街
 (實價金九拾錢)



著作者 森田米松

發行者 和田靜子

印刷者 石川金太郎

印刷所 株式會社 英舍

發行所 春陽堂

東京市日本橋區通四丁目五番地
 電話本局五十一番
 振替口座東京一六一七

森田草平氏の二作物

三版

自叙傳

橋口五葉氏裝幀
本文四百四十頁
實價壹圓拾錢
送料内地八錢

殆ど實感を以て書かれたることを否む能はざる小説なり。此點に於ては作者自身も稍
嫌焉たるものなくむばあらず。只、此作者に取つて、人生は却て藝術にして、實感が
既に藝術衝動に基くものなるを如何にせむ。

現代
文藝叢書
第十編

七版

初戀

新
型
頗
美
本
本文二百頁
實價廿五錢
送料金四錢

「初戀」と「驅落」とは姉妹篇にして、添ふるに「御殿女中」の一篇を以てす。共
に尾濃の方言を以て書かれたる小説なり。著者のグッド、チエチユアード、
マンとしての一面を表はせるものは、恐らく此姉妹篇なるべし

329
158

終